

第二八回 光華講座

仏教 — 智慧慈悲の世界 —

駒澤大学教授

片山 一良

はじめに

花は愛惜にちり 草は棄嫌におふるのみなり

今日は、このように静かな大学にお招きいただき、まことに有難うございます。真宗文化研究所長の太田先生、ならびに諸先生、そして、ここにお集まりくださいました皆様に、心から感謝申し上げます。

今日は、私が、日ごろ考え、また感じておりますことを、「仏教 — 智慧慈悲の世界」と題しまして、お話しさせていただきたいと思えます。

最近は、とくに天候・気候の異変が感じられ、また世界にはさまざまなテロや紛争の類も起こ

っております。また、つい先日は、日本でも、大変痛ましいJRの電車事故がありましたし、その少し前にも、大きな地震がありました。ただ、誰もが無事であるよう、願うばかりでございませぬ。人間の世界には、いつもこのような心の痛むことばかりが現われますが、私たちはそれにどう対処すればよいのか、だれもが苦慮しているところであります。もちろん、そのための答を出すことは容易ではありません。しかし、よくよく考えてみれば、いかなる問題も、そのほとんどは、いや、そのすべては、われわれ人間が自分から作り出したものである、ということになりそうです。すなわち、それは、自分自身の心にある、好き嫌いの産物でしかない、と言わざるを得ないようです。

たとえば、こういうことではないでしょうか。

日本人であるわれわれは、桜の花が大好きです。そのような花であれば、もっと見たい、長く見たい、「欲しい」というように、「自然」に対して、貪ります。しかし雑草のような草に対してはもう嫌だ、と「自然」に対して、怒ります。

また、天災である地震や津波に対しても、助かった者、残された者は無事を喜びつつ、たちまち、それらに対する人間の処置、対応の悪さに不平、不満を出してしまいます。「天災」を「人災」に変え、「自然」に対して、怒り、貪ります。

さらに、「人災」に対しては、たとえば薬害、公害、あるいは殺傷事件などに対しては、言うまでもなく、直接に怒りや食いを露にしています。

このように、人間は、何に対しても、貪があり、瞋があり、愚痴があり、これらから解放され

ることがありません。根本に無明があるからでしょう。私たちが無明に覆われている(無明の存在である)からでありましょう。

「花は愛惜にちり、草は棄嫌におふるのみなり」

(「正法眼蔵」現成公案)

これは、私たち普通の人間の素直な気持ちを語っている言葉だと思います。好きな花には散ってほしくない、嫌な草には生えてほしくない、確かにそうです。私たちには、このような吾がまま勝手な心があり、昔の中国の人々も、日本の人々も皆そうであったし、今の私たちの思いも変わらないようです。

しかし、花は人間に好かれないと思って咲くわけではないし、草も人間に嫌われないと思って生えるのではないでしょう。ただ人間が、自分の好き嫌いにより、品定めをし、自分で問題を作り出しているのみ、ということではないでしょうか。欲しい、欲しくない、というこの「欲」により、いつも取捨選択し、仏教的に言えば、あちこちに生死輪廻している、これが私たちの現実かと思われれます。取とは生、捨とは死、ということです。

私は、ここ十数年、「パーリ仏典」とか「原始経典」と呼ばれるお経の翻訳にたずさわらせていただいております。もちろん、これも私が自ら作り出したことではありませんが、同時に、仏に引かれて行なわれているものでもあります。今日まで、ずっとこの仕事が続いておりますことは、実に有難く、不思議と言わねばなりません。

その私が毎日読んでおりますお経には、いったい何が書かれているか、それは何のために書かれているか、ということ、本日の題目に沿って、お手元の配布資料により、お話を進めさせて

いただきたいと思えます。その趣旨を、最初に簡単に申し上げれば、お経には「智慧慈悲」が書かれており、お経は「智慧慈悲」のために書かれている、ということになります。それは、人間にとって、智慧がすべてであり、自他ともの一切に智慧がそなわるように願ひ、努力することがすべてである、ということでもあります。智慧は人生に最上の意味を与える「自在の力」であり、慈悲は智慧がすべての者にそなわるよう「願うこと」にはほかなりません。

## 一 仏 教

(1)「仏教」／「仏の教」／相對(世界)の仏教 (2)「仏すなわち教」／絶対(自己)

の仏教

本日のテーマは、「仏教 — 智慧慈悲の世界」という、まことに大きなものでありますが、まず、「仏教とは何か」ということについて、考えて見ます。

一般に、「仏教」とは、いわゆる仏教、英語で言えば Buddhism であると理解されています。それは、だれにも知られている、いわば制度化された「仏教」、キリスト教やイスラム教と比較される、世界宗教とされる「仏教」です。歴史や文化の層をもつ仏教と言うこともできます。社会で何らかの事件が起これば、宗教界の意見は、仏教界の意見は、と問われる場合の、誰もが認知している仏教です。これが第一に理解される仏教かと思われまます。

第二は、仏の教え、仏が説かれた教えです。言葉や文字に表わされたものであり、いわゆる純粹な「仏の教え」そのものであり、英語で言えば、Buddha's teachings と言うように理解され

るものです。歴史や文化に、また民族に左右されない仏教の教えと見られるものです。私たちが「仏教」について話をしたり、論じたりするものは、この二種のいずれかの仏教、つまり相對(世界)の仏教であると考えられます。

しかし、このような、あれこれという、大きい小さいという、社会的な、また言葉を介しての、「相対的な仏教」に対して、それを超えた、自己の、全人格的な、いわば「絶対的な仏教」というものがあります。それは、「仏すなわち教え」と解される仏教です。「仏という教え」です。これは、普通の考え方ではなかなか理解できません。私たちは、仏といえは人格的なもの、教えとか法といえは非人格的なものと見ますが、それが、一体、一枚でしかない、というものです。常識的な言葉を超えたものになります。たとえば、つぎのような道元禪師の言葉が知られます。

「諸仏の道現成、これ仏教なり。これ仏祖の仏祖のためにするゆゑに、教の教のために正伝するなり。これ転法輪なり。この法輪の眼睛裏に諸仏祖を現成せしめ、諸仏祖を般涅槃せしむ。その諸仏祖、かならず一塵の出現あり、一塵の涅槃あり。尽界の出現あり、尽界の涅槃あり。一須臾の出現あり、多劫海の出現あり。しかあれども、一塵・一須臾の出現、さらに不具足の功德なし、……。このゆゑに朝に成道して夕に涅槃する諸仏、いまだ功德かけたりといはず。もし一日は功德すくなしといはば、人間の八十年ひさしきにあらず。人間の八十年をもて十劫二十劫に比せんとし、一日と八十年のごとくならん。此仏彼仏の功德、わきまへがたからん。……このゆゑに仏教はすなはち教仏なり、仏祖究尽の功德なり。諸仏は高広にして、法教は狭小なるにあらず。……このゆゑにふるべし、仏および教は、大小の量にあらず、

善・悪・無記等の性にあらず、自教他のためにあらず」

〔正法眼蔵〕仏教

と。

ここに「仏教はすなはち教仏なり、仏祖究尽の功德なり」と言われておりますが、これは、仏の教えはすなわち教えの仏である、それが仏の功德である、ということ述べたものです。私は原始仏教の經典（パーリ仏典）に学んでおりますが、同時に『正法眼蔵』という道元禪師の書かれた書を、いつも読みます。こちらの大学に直接かわつておられる親鸞聖人の『教行信証』もよく読ませていただいております。すぐれた祖師方は言葉を巧みに用いております。一つの大事なものを表現するのは大変難しい、そこで祖師方は非常にたくさん言葉を、しかも過不足なく用いて、述べておられます。目に見えないものを見えるようにしたい、耳に聞こえないものを聞こえるようにしたい、心に捉えられないものを捉えられるようにしたい、それが祖師方の言葉かと思われます。ここはそのような祖師が捉えておられる仏教、祖師の理解として示された言葉でございます。

「諸仏の道現成、これ仏教なり」とあります。「道」は言葉という意味に解されます。諸仏の言葉の実現というものが仏教である、と述べておられます。「仏が仏のためにする、教えが教えのためにする」、これが正伝の仏法であるということです。「一塵の涅槃」、あるいは「尽界の涅槃」と言おうと、「二日」、「八十年」、「十劫二十劫」の功德と言っても何ら異なりはない、仏、及び教えは、大小の量にあるのではない、ということです。

いずれも難しい言葉で述べられていますが、ただ一つのことを言っております。これは、時

間も場所も超えている「仏教」と解されます。「仏」でもあり、「教」でもあり、「功德」でもあるものです。それは、「絶対(自己)の仏教」というより他はありません。別の言い方をすれば、「今」「ここ」の仏教ということになります。

このように、仏教は、二種、あるいは三種にして見ることができると思われます。

## 二 智慧慈悲

- (1)「智慧と慈悲」
- (2)「智慧すなわち慈悲」

では、その「仏教」の内容は何か、です。すなわち、「仏」とは何か、「教え」とは何か、です。仏の内容は、智慧・慈悲に尽きる、これが仏教の世界における正しい理解かと思われれます。經典のいたるところに、その言葉、それに類する考えが知られるとおりです。

ではまた、この「智慧慈悲」という言葉は、どのように理解されるか、であります。

### (1)「智慧と慈悲」

第一は、「智慧と慈悲」というもの、あるいは「智と慧」、「慈と悲」と、それぞれを分けて理解されるものです。いずれも、これは一般的に説明される理解です。

「智慧」は、自覚、自利、とも言われますが、自己の覚り、自己の利益であり、それは「自己の苦滅にはたらく力」も考えられます。苦滅、苦を滅する、とはどういうことか。苦というのは、私たちが好き嫌いをして最終的には苦しんでしまうということです。そのような苦を自ら作り得

ない、これが苦滅ということ。その苦滅に自ら向かう、そのような力が智慧と言っているのと思います。いわゆる上求菩提の、洞察の力、執着のない自在の力、であります。貪瞋痴という、貪り、怒り、愚痴に支配されない、無貪・無瞋・無痴の「寂靜」を実現する力に他なりません。

たとえば、長部26「転輪王経」(第31節)の最後部分に、つぎのような釈尊の言葉があります。(このお経は、善の功德とは何かを、輪転にいたるものと、還転にいたるものとの二種によって説いたものです。前者は世間の、王中の王とされる転輪王の栄華が、後者は出世間の、三十七菩提分法の智慧、道・果・涅槃の成就が、その終極として示されております)「比丘たちよ、比丘の威力とは何か。

比丘たちよ、ここに、比丘は、もろもろの煩惱の滅尽により、煩惱のない心の解脱、慧の解脱を、現世において自らよく知り、目のあたり見、成就して住みます。

比丘たちよ、これが比丘の威力です」

と。ここに、「比丘の威力」として、心の解脱、慧の解脱が述べられておりますが、これは無貪・無瞋・無痴、すなわち智慧による自在をいうものです。智慧による、自ら苦を作り得ない、苦滅が説かれております。

(なお、原始経典においては、「智」と「慧」は、智慧の全体を意味する語です。両者は同義語としても使われておりますが、一般的に、「智」は靜的な知性として、「慧」は動的な知性として用いられていると言えます)



「慈悲」は、これに対して、覚他、利他とも言われるように、「他者の苦滅を求める心」です。いわゆる「下化衆生」の、他を慈しむ心、憐れむ心(コンパッション)、苦しみを共にする心)であり、これは「説法」において極まるものと言えます。「法施はあらゆる施にまさる」(「法句経」第34)という仏の言葉がありますが、法施は最上です。法である智慧が他者にそなわれれば、すべてにおいて自在となるからです。

もちろん、慈悲には、さまざまのものがあ、り、すばらしい実践があります。

たとえば、同じ長部26「転輪王経」(第31節)の、先の引用箇所の前に、つぎのような説示があります。

「比丘たちよ、比丘の財産とは何か。比丘たちよ、ここに、比丘は、

慈しみのある心をもって、一つの方向を、同じく第二の方向を、同じく第三の方向を、同じく第四の方向を満たし、住みます。このようにして、上を、下を、横を、一切処を、一切を自己のこととして、すべてをふくむ世界を、慈しみのある、広い、大なる、無量の、恨みのない、害意のない心をもって満たし住みます。

憐れみのある心をもって、……憐れみのある、広い、大なる、無量の、恨みのない、害意のない心をもって満たし住みます。

喜びのある心をもって、……喜びのある、広い、大なる、無量の、恨みのない、害意のない心をもって満たし、住みます。

平静のある心をもって、……平静のある、広い、大なる、無量の、恨みのない、害意のない

心をもって満たし住みます。

比丘たちよ、これが比丘の財産です」

と。

つまり、慈・悲・喜・捨(四無量心・四梵住)が「比丘の財産」だということです。慈しみのある無量の心をもって、憐れみのある無量の心をもって、生きとし生けるものがすべて幸せになるように願ひ、満たし、住むとあるんですね。また、無量の、喜びのある心、平静のある心をもって、すべての世界を満たす、とあります。なんとすばらしい財産でしょうか。いつでも取り出すことのできる財産です。この慈悲の実践は、パーリ仏典にいつも説かれ、勧められているものです。

(なお、「慈」とは、真の友情、「与楽」ということであり、その伝統的修習に528種があります。また、「悲」とは、楽を隠す、他者の苦に同情すること、「抜苦」と言われております)

これが一般に言われる慈悲の形でございますが、その慈悲というものは、すでに述べましたように、「説法」、すなわち、法を説くことに、つまり、智慧を示すことに、極まると言っているかと思われまゝ。智慧がそなわれれば、真の安らぎを知ることができるからであります。

このように、智慧慈悲は、「智慧と慈悲」に分けて理解することができます。

## (2)「智慧すなわち慈悲」

第二は、以上の「智慧と慈悲」という一般的、相対的な理解に対して、「智慧すなわち慈悲」

という絶対的とも言える理解があるということです。たとえば、親鸞聖人はつぎのように示しておられます。

「金剛心はずなはちこれ願作仏心なり。願作仏心はずなはちこれ度衆生心なり。度衆生心はずなはちこれ衆生を撰取して安楽浄土に生ぜしむる心なり。この心はずなはちこれ大菩提心なり。この心はずなはちこれ大慈悲心なり。この心はずなはちこれ無量光明慧によりて生ずるがゆへに。願海平等なるがゆへに発心ひとし。発心ひとしきがゆへに道ひとし。道ひとしきがゆへに大慈悲ひとし。大慈悲はこれ仏道の正因なり。かるがゆへに、論の註にいはいはく、かの安楽浄土に生まれんと願するものは、かならず無上菩提心を発するなり。

またいはいはく、是心作仏といふは、いふこゝろは心よく仏になるなり。是心是仏といふは、心のほかに仏ましまさずとなり。たとへば火、木よりいで、火、木をはなる、ことをえず。木をはなれざるをもてのゆへに、すなはちよく木をやく。木、火のためにやかれて木すなはち火となるがごとし。光明のいはいはく、この心作仏す、この心これ仏なり、心のほかに異仏ましまさず」

(「教行信証」信卷)

と。

すばらしい言葉です。「願作仏心は、すなはちこれ度衆生心なり」とありますが、これは、まさしく「智慧すなわち慈悲」、智慧という慈悲を示されたものと理解されます。自覚覚他、自利利他円満をいうものです。さらに、「この心は、すなはちこれ大菩提心なり。この心、すなはちこれ大慈悲心なり」と説いておられます。智慧慈悲の一体であることが示されております。また、

ここには大変興味深い比喻もございます。火と、燃える木の関係は何なのか。これは一体である、とあります。名前は別ですが、一体でなければ燃えることはない、そのように心は仏である、無上菩提心とは大慈悲心である、ということを示しておられます。智慧円満、「智慧すなわち慈悲」ということでございます。仏は、智慧であり、慈悲であり、如来である、ということに他なりません。これは、他に目を移せば、「般若」とも言えますし、「禪」とも言えますし、そして「念仏」とも言えましょう。

以上のように、仏教の内容たる「智慧慈悲」もまた、相対的なものと絶対的なものによって、理解ができるかと思われまます。

### 三 仏 經 (1)「仏の經」／法門の經 (2)「仏すなわち經」／如是の經

では、つぎに、「仏の教え」を示す「仏經」とは何か、を見たいと思います。お經は、八万四千の法門とも言われますように、仏が無数の悩み苦しむ人々に、各自に、相応しく説かれた法であり、言葉であり、それを文にしたものと理解されます。

この「仏經」にも、いわゆる「仏の經」という理解と、「仏すなわち經」という理解があります。「仏の經」とは、一般的な、法門としての經であり、さまざまに説かれた「有相の經」です。これに対して、「仏すなわち經」という場合の經は、いわば「無相の經」であり、「如是の經」と言つてよいものかもしれません。

お経は、他人事で読むものではない、すべて自分のために書かれてあると見て読まなければならない、ということでありましょう。二千五百年前の仏の言葉も、千年前の祖師方の言葉も、それらはすべて自分のために、私一人のために説かれたものと見なければ何もわからない、お経はどこまでも自分と共に学ばなければならないものと思われまます。

(1)「仏の経」 仏語の六分類 A. 法の説示 B. 法の内容

まず、「仏の経」ではありますが、これは仏語(Buddha-vacana)として、伝統的には、六種に分類されております。すなわち、

1. 「解脱味」による一種、
  2. 「法と律」による二種、
  3. 「三蔵」(経・律・論)による三種、
  4. 「五部」(長部・中部・相應部・増支部・小部)による五種、
  5. 「九分教」(経・応頌・授記・偈・自説・如是語・本生・未曾有法・有明)による九種、
  6. 「八万四千の法門」による法蘊、
- というものです。

一種とは、仏語であるお経の二つがすべて解脱の味からなるということ、  
「解脱味」のものである分類です。二種とは、仏の教えである法と、その法を学ぶ者の生活規定である律という、「法と律」にまとめる分類です。三種とは、一般的な経蔵・律蔵・論蔵という三蔵による分

類です。五種とは、長部(長い經の集成)、中部(中程度の長さの經の集成)、相应部(主題が関係している經の集成)、増支部(法の数でまとまられる經の集成)、小部(以上の四部に収められない經と律藏と論藏)という五部による分類であり、最広義の五ニカーヤと呼ばれるものです。九種とは、仏語を、その内容と形式とから、九つ、すなわち經・応頌・授記・偈・自説・如是語・本生・未曾有法・有明に分けたもので、「九分教」と呼ばれるものです。伝統仏教において、仏の教えとか、仏教聖典という場合、これを指すのがふつうです。第六の分類は、仏語を「八万四千の法門」とする、数に限定されない、無数の法蘊と見るものです。このように、仏の言葉は六分類により説明されております。

これらの六種は、いずれもその形式、あるいは量において異なりますが、内容においてはまったく異なるところがありません。六種はすべて、その各々が「一切經」であり、「仏語」であると言えます。

A. 法の説示(慈悲) 六事成就ノ世俗説示・勝義説示ノ楽味・危難・出離ノ十八根本語

お経は「法」を内容とするものであり、その法は「智慧」を内容とするものであります。この法を説く、智慧を覚らせる、これが仏の「慈悲」と呼ばれるものでございます。この仏の説法、説示であります。これには一定の形式が知られます。

(説示の形式) たとえば、般若經の註釈書でもあります「大智度論」卷第一(大正藏第25卷)などに、「六事の成就」として説明されているとおりです。

「大般若波羅蜜多經」卷第一(大正藏第5卷)は、

「如是我聞。一時薄伽梵。住王舍城鷲峰山頂。与大苾芻衆千二百五十人俱」

という言葉で開始されておりますが、ここに六事が成就しているというのです。

具体的に言いますと、(カッコ内は漢訳經典に相応するパーリ語の原始經典の訳語)

1. 「信の成就」|| 「如是」(このように)、
2. 「聞の成就」|| 「我聞」(私は聞いた)、
3. 「時の成就」|| 「一時」(あるとき)、
4. 「主の成就」|| 「薄伽梵」(世尊は)、
5. 「処の成就」|| 「住王舍城鷲峰山頂」(王舍城に近い、鷲峰山に住んでおられた)、
6. 「衆の成就」|| 「与大苾芻衆千二百五十人俱」(千二百五十人の比丘からなる大比丘僧団とともに)、

ということですが。そのうち、お経の最初の言葉である「如是」が「信の成就」であるということについては、「大智度論」によれば、「信とは、是の事、是の如し、と言ふ」というように、信こそ佛法の大海に入らせるものであり、如是は信にはかならないからである、と説明されています。たしかに「如是」は始まりであり、根幹であり、「信」に等しい道のもと、功德の母と言えます。お経と呼ばれるものは、一般に、この「六事の成就」により開始されておりますが、それは漢訳經典の場合でも、原始經典の場合でも同じです。

ただ、第五の「処の成就」については、字面は同じでも、解釈の仕方が若干異なります。原始

經典では、場所を、(1)村・町・都、(2)森・林・山、というように、二種にはつきり分けております。それは、(1)は在家者の住む場所であり、同時に出家者が托鉢する場所、(2)は出家者が住む場所、ということ、区別されたものです。たとえば、この場合ですと、「王舎城に近い、鷲峰山において」というように、「王舎城」という出家者の托鉢地と、「鷲峰山」という出家者の居住地とを、明確に分けて、理解されます。釈尊時代の出家生活の厳格さが窺われます。このように經典によって若干の解釈の相違は認められますが、基本的にはどのお経も「六事の成就」に始まっております。

なおまた、形式として、お経の終わりは、漢訳經典であれば「聞仏所説、歡喜奉行」という言葉で、原始經典であれば「世尊が説かれたことに歡喜した、と」という言葉で結ばれるのが普通です。

(説示の種類) つぎに、お経はどのように説かれているか、です。説示にはどのような種類があるのか、ということ、お経は、どのようなものも、二種、すなわち世俗諦による「世俗説示」と、勝義諦による「勝義説示」とをもって説かれていると言つてよいかと思われま。お経は誰もわかる言葉で語られています、その内容としての法、あるいは智慧は、すぐにわかるものでもなければ、見えるものでもありません。必ず自分の体験をとおして明らかになるのです。しかし、文字や言葉で学ぶことができるように、まずは先ほどの「六事の成就」のように、一般の常識的な言葉、有相の世俗諦によって示されます。ついでそのような常識を超えた言葉、無相の勝義諦によって説かれます。別な言い方をすれば、事に対する理、差別に対する無差別、語に



対する黙、によって語られております。非常に丁寧に述べられております。とは言いまでも、お経は、どんなに短いものでも、長いものでも、このように表の部分と表に現れない部分がありますから、自分の生活をおささない限り、容易に明らかにならないものと思われれます。

(説示の運用) つぎに、お経の内容である法は、どのように説示されているのか、どのように説示が運用されているか、を見ることにします。たとえば、長部の第一經典である『梵網經』を初めとして、さまざまな經の中に、「楽味」「危難」「出離」という言葉による、説示の枠組みが知られます。私たちは誰も経験的事実として、あることを楽しみます。しかし、苦しみます。そこで、苦しみから離れます。この事実を、釈尊は、「楽味」「楽味」「危難」「出離」という言葉にまとめ、私たちが経験するすべてのことを、一切の苦として洞察し、苦からの解放、解脱(自由)、智慧を明らかにし、これを説かれました。それは、ちょうど釈尊の伝記から知られる、王宮の生活(楽)、苦行の生活(苦)、菩提樹下の禪定(出離)に符合するものでもあり、また、楽・苦・中におさまるものでもあります。このように、説示には、いつも「楽味」「危難」「出離」という枠組みが運用として見られます。

(説示の根本語) では、そのような説示に、どのような語が用いられるのでしょうか。それは、内容にも関係しておりますが、つぎのような「不善の九語」「善の九語」からなる「十八根本語」と呼ばれるものが知られます。

不善の九語 〓 渴愛・無明／貪・瞋・痴 〓 淨想・楽想・常想・我想

善の九語 〓 止・観 〓 無貪・無瞋・無痴／不淨想・苦想・無常想・無我想

お経、すなわち仏の法は無数の言葉で語られていますが、基本的には、これら「善」「不善」の十八の語のいずれかによる、と言えます。「不善」は迷いの方であり、「楽味」「危難」の輪転に関わるものです。渴愛・無明は十二縁起の支分をなす直接・根本の煩惱であり、貪・瞋・痴はいわゆる三毒の根本煩惱です。淨想・樂想・常想・我想は、私たちが愚かなうちは誤って執着する、四顛倒の見方です。これに対して、「善」は迷いのない方であり、「出離」の還転に関わるものです。「不善」のそれぞれは、それに対応する「善」のそれぞれによって対治されます。たとえば、渴愛は止による、無明は観による、淨想などの四顛倒は不淨想などの四念処による、というようにです。お経はこのような根本語をもって必ず示されているということでもあります。

（なお、この「十八根本語」については、パールの蔵外聖典ともされ、また最もすぐれた聖典解釈法の書である『指導論』に詳しく述べられています）

#### B. 法の内容（智慧） 解脱味／縁起を見る／「縁経」／「ヴィサーカー経」

さて、このお経の内容としての法ですが、すでに見ましたとおり、それは「智慧慈悲」であり、「智慧」に極まります。先の仏語の六分類の、第一の「解脱味」であります。どのお経も解脱の味がするものです。では、その「解脱」とは何か。すでに「比丘の威力」について見ましたように、それは「心解脱」「慧解脱」ということになります。それは「渴愛滅」「無明滅」というもの、すなわち、「苦滅」というものであります。そして、その滅せられる「渴愛」「無明」とは、縁起にはかなりません。この「渴愛」「無明」を知る、すなわち「縁起」を知る、これが智慧という

ものです。中部経典「大象跡喻経」に、

「縁起を見る者は法を見る、法を見る者は私(仏)を見る」

と言われております。あるいはまた、相應部経典「ヴァツカリ経」に、

「法を見る者は私を見る、私を見るものは法を見る」

と言われておりますように、縁起、法、仏は一体のものです。

そこで、この法の中心である「縁起」について、資料の相應部経典「因縁相應」の「縁経」に  
より、見ることにいたします。主要箇所はつぎのとおりです。

○ ○ ○

「比丘たちよ、たとえば、山頂で大水滴の雨が降ると、その水は低きに従って流れ、山、溪谷、  
谷川を満たします。山、溪谷、谷川は満ちて、小池を満たします。小池は満ちて大池を満た  
します。大池は満ちて小川を満たします。小川は満ちて大川を満たします。大川は満ちて大  
海、海洋を満たします。

比丘たちよ、ちょうどそのように、

(世間の縁起)

無明を縁としてもろもろの行があります。

(惑)

もろもろの行を縁として識があります。

(業)

識を縁として名色があります。

(苦)

名色を縁として六処があります。

(苦)

六処を縁として触があります。

触を縁として受があります。

受を縁として愛があります。

愛を縁として取があります。

取を縁として有があります。

有を縁として生があります。

生を縁として苦があります。

(出世間の縁起)

苦を縁として信があります。

信を縁として満足があります。

満足を縁として喜があります。

喜を縁として軽快があります。

軽快を縁として楽があります。

楽を縁として定があります。

定を縁として如実智見があります。

如実智見を縁として厭離があります。

厭離を縁として離貪があります。

離貪を縁として解脱があります。

(苦)

(苦)

(苦)

(惑)

(惑)

(業)

(苦)

(戒)

(定)

(慧)

(解脱)

(正語・正業・正命)

(正精進・正念・正定)

(正見・正思)

解脱を縁として滅尽智があります」

(解脱智見)

と。



このうち、「比丘たちよ」とは弟子たちに対する言葉です。そして、「無明を縁としてもろもろの行があります」云々と、一般に言われる「世間の縁起」が示されています。惑(煩惱)により、業を作り、苦を得る、この惑・業・苦の連鎖により、私たちが苦しむ輪転(輪廻)の世界(つまり世間)を説明する縁起です。

それから、「出世間の縁起」が続き、戒・定・慧に相應する実践により、解脱にいたる還転の世界(つまり出世間)が説明されますが、まず「苦を縁として信がある」と説かれています。そして、「信を縁として満足がある」と。「満足」というのは弱い喜びです。つぎに「喜」(強い喜び)、「軽快」(安止の前分である楽の縁)、「楽」(基礎の禅の縁)、「定」(基礎の禅、弱い観の縁)がそれぞれの縁として説かれ、続いて「定を縁として如実智見がある」と説かれています。この「如実智見」は弱い観です。さらに「厭離」(厭離智、強い観)、「離貪」(阿羅漢道)、「解脱」(阿羅漢果)、そして最後に「解脱」を縁とする「滅尽智」(解脱智見)が説かれています。これは漏尽と称する阿羅漢果が得られたときの観察智であります。

以上のように、この「縁経」において、釈尊は、まず「世間の縁起」を述べられ、続いて「苦を縁として信がある」という最も大事な「苦」「信」による発起が示され、解脱ないし智慧の獲得にいたる「出世間の縁起」を説いておられますが、この縁起こそ、法そのもの、ということ

あります。お経には、このようなことが法の内容として説かれております。なお、ここにおける「世間の縁起」「出世間の縁起」という呼称は、先に触れました『指導論』によるものです。

さらにまた、お経の全体と法の内容を知るために、小部経典「自説」の「ヴィサーカー経」を見ることにいたします。先に触れました「六事の成就」の形式も、具体的に理解できるかと思われま

れます。

○ ○ ○ ○ ○

このように私は聞いた―

あるとき、世尊は、サーヴァッティ(舍衛城)に近い東園のミガラマター殿堂(鹿子母講堂)に住んでおられた。ちょうどそのとき、ミガラマターのヴィサーカー(布施第一の女性信者)の、愛しい、可愛い孫娘が亡くなった。

ときに、ミガラマターのヴィサーカーは、真昼時に、衣服を濡らし、髪を濡らして、世尊がおられるところへやって来た。来て、世尊を礼拝し、一方に坐った。一方に坐ったミガラマターのヴィサーカーに、世尊はつぎのように言われた。

「ヴィサーカーよ、そなたは、いったい、なぜ来たのですか。衣服を濡らし、髪を濡らして、真昼時にここへ来ていますか」と。

「尊師よ、私の愛しい、可愛い孫娘が亡くなりました。そのため、私は、衣服を濡らし、髪を濡らして、真昼時にここへ来たのでございます」と。

「ヴィサーカーよ、そなたはサーヴァッティの人々と同じ数の子や孫を欲しますか」

「尊師よ、私はサーヴァッティの人々と同じ数の子や孫を欲します」  
「しかし、ヴィサーカーよ、サーヴァッティでは、毎日、どれほど多くの人々が亡くなっているのでしょうか」

「尊師よ、サーヴァッティでは、毎日、十人が亡くなることもあります。……九人、八人、七人、六人、五人、四人、三人、二人……一人が亡くなることもあります」

尊師よ、サーヴァッティでは、人が亡くならないことはありません」

「ヴィサーカーよ、そのことをどう思いますか。はたして、そなたは、いつかあるとき、衣服を濡らさずに、あるいは髪を濡らさずに、済ますことができるか、ということですよ」

「尊師よ、それはできません。私には、多くの息子も孫も、充分にございます」

「ヴィサーカーよ、百の愛しいものがある者たちには、百の苦しみがあります。九十、八十、七十、六十、五十、四十、三十、二十、十、九、八、七、六、五、四、三……二の苦しみがあります。一つの愛しいものがある者たちには、一つの苦しみがあります」

愛しいものがない者たちには、苦しみがありません。かれらは憂いがない者、塵垢がない者、悩みがない者である、と私は説きます」と。

そこで、世尊はこのことを知り、そのとき、つぎのような感嘆の言葉を発せられた。

「いかなる愛い、悲しみも 世のさまざまな苦しきも

これらは愛しいものより起り 愛しいものがなければ起らず

それゆえ、楽あり、憂いなし  
愛しいものが世になければ  
それゆえ、無愛、離垢を願ひ  
世に愛しいものを作るなかれ  
と。

短いお経ですが、全体に釈尊の智慧と慈悲が満ちております。しかも大変わかりやすいお経であり、その趣旨は偈(詩句)の中に尽くされております。

(2)「仏すなわち経」 「経巻は如来全身なり」 「如来の本願をとくを経の宗致とす」

以上、これまでに見てきましたのは、いわば相対的な言葉をとおしてのお経であり、「法門の経」というべきものですが、お経にはまた、言葉とか文字を超えたものが説かれております。それが「仏すなわち経」ということでございます。「如是の経」と言われるべきものであります。たとえば、祖師の言葉でありますが、つぎのように示されています。

「経巻は如来全身なり、経巻を礼拝するは如来を礼拝したてまつるなり」

(「正法眼蔵」如来全身)

「いま現成せる正法眼蔵はすなはち仏経なるがゆゑに、あらゆる仏経は正法眼蔵なり」

(「正法眼蔵」仏経)

と。また、つぎのようにも示されております。

「如来の本願をとくを経の宗致とす。すなはち仏の名号をもて経の体とするなり」



〔教行信証〕教巻

「無愛無疑はすなはち真解脱なり。真解脱はすなはちこれ如来なり。如来はすなはちこれ涅槃なり」  
〔教行信証〕真仏土巻

と。

前者は、いわば「禪」の真実を、後者は「真宗」の真実を述べられたものです。この場合の「経」は仏であり、法であり、光であり、智慧であり、如来であり、大慈悲であります。無愛、無疑、楽、無愛、離苦、解脱、涅槃です。このように経は、仏の智慧を慈悲でもって説き、これを聞く者、見る者、すべてに、安らぎ、寂靜をもたらすものと言えます。

それは、先に見た「ヴィサーカー経」の「偈」の中で、仏がすでに明らかにしておられるところ です。

「楽」「無愛、離垢」というのは「涅槃」(無貪・無瞋・無痴)ということ です。「願い」とは「善を願い」ということ、如来の家に生まれることを願い、聖者を願い、ということ です。「世」というのは「世界」という意味です。それは、間違いなく、自分自身、「自己」という意味です。「愛しいもの」というのは、愛しいものだけではなく、悲しいものも、憎いものも含む「愛憎」を示しています。私たちがあれこれと取捨する「分別」というものを示す言葉です。「作るなかれ」とは、生死輪廻に迷うなかれ、業輪廻を超えよ、執着するなかれ、という内容です。さまざまな言葉による説明がありますが、すべては、自己の、「今の念」、「この坐」にある、ということ があります。

この釈尊の、仏の、智慧の言葉、そして慈悲の願いこそ、仏教そのものと言えます。ウイサーカーに「無愛」を願われた仏の言葉こそ、智慧慈悲に他なりません。それはまさに、

「仏教はすなはち教仏なり、仏祖究尽の功德なり」ということであり、

「願作仏心は、すなはちこれ度衆生心なり」

という言葉に示しつくされているかと思われず。

おわりに 柳は緑 花は紅 如来を拝したてまつる

最後に、「柳は緑 花は紅」というよく知られた言葉をご紹介させていただきます。誰もが、このような自然の道理に、すなわち因果の道理に、仏に、学び得れば、と思います。

「龍樹の偈に曰く、『もし人、善根を種えて 疑へば則ち華開かず 信心清浄なる者は花開け 則ち仏を見たてまつる』と」  
〔往生要集〕大文第二

仏を信じ、歩む、この信こそ、私たちの生活の根幹になるものであります。

私が読んでおりますお経から、私の知る智慧の世界、慈悲の世界を、少しご紹介させていただきますました。ご静聴ありがとうございます。



司会 ありがとうございます。ご質問がございましたらよろしく願います。

質問 先生は浅野内匠頭と縁の深いお寺のご住職ですが、大石内蔵助が仇討ちを行ったことについてどうお考えですか？

片山 『法句経』(第五) につきのような言葉があります。

「この世の怨みは怨みをもって 静まることはありません

怨みを捨ててこそ静まる これは永遠の法である」

これにはついては興味のある話がございます。ある資産家の息子が嫁を迎えます。しかし子どもができない。そこで新しい嫁を迎えます。すると前の嫁は、自分の座が奪われることを恐れ、新しい嫁が妊娠すると、食べ物に堕胎薬を混ぜて飲ませます。彼女は、三回流産させられ、苦しみ、薬を飲まされたことに気づきます。そして命果てるわけですが、その直前に「お前は私の子を三人も殺した。今度は夜叉に生まれ変わり、お前の子を食い殺してやる」と願をかけて死にます。このようなことで、次々生まれ変わっては互いに殺しあいますが、それでもおさまらない。とうとう仏に助けを求め、この教えを受け、怨みが静まったというのです。どんなにしても怨みは怨みをもって消えることはない、大きな慈悲によって、耐えることによって、消える、と。耐えるためには智慧がいるわけです。広大な慈悲と智慧によってこそ怨みは静まるということです。このようにしてその束縛から解放されたということです。

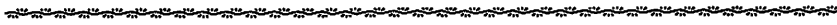
私は、住職になりましたから、お寺は仏法によつて守られるもの、お寺はそういう(浅野長矩公と赤穂四十七義士との)因縁がありますから、(関係する方々を含むすべての者の)お墓も同じもの、と考えました。そして、「仇討ち」というおよそ仏教の教えから遠いことを、とくに「忠義」も含めて、どうとらえればよいのか、それは日本の時代精神としてとらえるよりほかはない、こう思いました。確かに江戸時代においては一般の人々に共感を得たようではありますが、民主主義の今日では、その評価もさまざまです。

仇討ちについては、切腹した浅野長矩公にも無念があり、残された大石をはじめとする家来たちにも無念がある。一方、討たれた吉良義央公にも、残された家来たちにも無念がある。どこをとつても残念という意味の無念ばかりのように思われます。このことも、よく見てみますと、「争い」に始まるものであり、その根底には、貪りや、怒り、愚痴があるということであります。歴史(相対社会)はそういうものとしか言いようがありません。

そこで釈尊は、二千五百年前にはつきり言われました。「怒みは怨みを捨ててこそ静まる」と。怨みを捨てるとは耐えること、耐えるというのは、大きな慈悲、勝れた智慧による、と註釈書にも書いてあります。それ以上のことは申し上げられません。

質問 如来を拝したてまつるという言葉を最後に置かれていますか。

片山 「如来を拝したてまつる」とは、私自身、いつも仏を拝しておりますから、そのように。これは本当は初めに置かれなければならない言葉ですが、お話の流れで最後に結びとさせていた



だ  
き  
ま  
し  
た  
。